

物語志向性を考慮した公共政策における 物語型コミュニケーション効果についての研究

高橋 祐貴¹・川端 祐一郎²・宮川 愛由³・藤井 聡⁴

¹学生会員 京都大学大学院工学研究科都市社会工学専攻（〒615-8540京都市西京区京都大学桂4）

E-mail:y.takahashi@trans.kuciv.kyoto-u.ac.jp

²学生会員 京都大学大学院工学研究科都市社会工学専攻（〒615-8540京都市西京区京都大学桂4）

E-mail:kawabata.yuichiro.78m@st.kyoto-u.ac.jp

³正会員 京都大学大学院助教工学研究科都市社会工学専攻（〒615-8540京都市西京区京都大学桂4）

E-mail:miyakawa@trans.kuciv.kyoto-u.ac.jp

⁴正会員 京都大学大学院教授工学研究科都市社会工学専攻（〒615-8540京都市西京区京都大学桂4）

E-mail:fujii@trans.kuciv.kyoto-u.ac.jp

近年、情報を物語形式で伝える「物語型コミュニケーション」が社会科学諸分野において活用され、公共政策の遂行に不可欠な政治心理の醸成においても、その有効性が検証されつつある。ただし、その効果は個人の物語に対する志向性に影響を受けるものと考えられる。本研究では、他人を物語に引き込む能力である「物語誘引力」、物事を物語的に把握する能力である「物語感得力」、物語的エピソードを共有することで社会的な関係を構築・維持する傾向である「物語共有傾向」の下位尺度からなる「物語志向性尺度」を構成し、物語型コミュニケーションの効果に及ぼす影響を検証した。結果、「物語誘引力」及び「物語共有傾向」の高い個人における物語型コミュニケーションの有効性が示された他、政治心理の醸成における「物語感得力」の重要性が示された。

KeyWords: narrative, consensus building, communication, public policy

1. 背景・目的

(1) 公共政策における合意形成手法の検討の重要性

公共政策とは、社会保障や安全保障といった個人では解決することが難しい公共的な問題に対処するための、解決の方向性と具体的手法とされており¹⁾、主として国や地方自治体の行政によって人々の長期的・広域的な便益の増進を目的として実施されるものである。一方で、公共政策は社会全体の便益増進を企図するがゆえに、その実施過程において、次のような問題が生じることがしばしば指摘されている。一つは、公共政策は往々にしてプロジェクトが大規模になることから、政策目標の選択から具体的な施策の選択に至るまでの様々な段階において、政策当局および多数の利害関係者が登場することとなり、それゆえに関係者の総意を得ることは容易ではないという問題である。他にも、公共政策が大規模であるがゆえに、プロジェクト期間が長期に渡り時間の経過とともに変化する社会情勢の影響を受けやすく、その結果、当該政策の意義に関する議論が置き去りにされたまま、政策に対する人々の心理や態度が変化してしまうという問題がある。実際に、1952年から計画されていた八ツ場

ダムの建設は、2009年の政権交代によって誕生した政権与党の「コンクリートから人へ」というスローガンの元、その事業の中止が表明された²⁾。

こうした問題が生じる背景には、公共政策に内在する長期的・公的な利益と短期的・私的な利益が相反するという「社会的ジレンマ」の存在が指摘されている³⁾。このジレンマ状況下において、社会全体の長期的な便益の増進をもたらす公共政策を推進するためには、個々の公共政策の内容の適切さに関する議論が必要であることは論を俟たないが、そうした議論の前提として、当該政策に対する人々の関心や当該政策がもたらしうる社会的便益に対する理解などの「政治心理」の醸成が必要不可欠といえよう⁴⁾。

ここで、人々の政治心理の醸成には、行政やマスメディアの情報発信をはじめとしたコミュニケーションが影響を及ぼしていることが既往研究において指摘されている。例えば、田中らはマスメディアの報道内容によって公共政策に対する否定的なイメージが形成される可能性を実証的に明らかにしている⁵⁾。また、羽鳥らは政府の公共事業に関わる政治的・行政的論点に対する人々の賛否意識に関して、マスコミ報道が個人の潜在的賛否規定

要因に対する影響を通して、個人の賛否意識にも影響を与えるという心理的因果プロセスの存在を実証的に明らかにしている⁸⁾。

以上を踏まえると、人々の政治心理の形成に多大な影響を与えうる、特定の形式のコミュニケーションを明らかにすることは、公共政策における合意形成や意思決定のあり方を考える上で重要な意味を持つものと考えられる。

(2)物語の政策コミュニケーションへの応用可能性

近年、社会科学諸分野において、人間の心理や行動、社会現象を分析するために、物語（ナラティブ）の概念に対する注目が高まりつつある。既往研究において、物語が「関心の強化」、「批判的思考の抑制」、「記憶・想起の向上」、「思い込みの除去」といった様々な効果を有することが実証されている^{例えは7), 8), 9)}。さらに、臨床心理学や経営学の分野においても、このような物語の効果が着目され物語型の情報を実践の場で活用している^{例えは10), 11), 12)}。

さらに、公共政策における物語の役割を見てみると、藤井(2011)では、意思決定の場面において「人々は、予め持っている自己物語の一貫性を保つ方向の選択肢が選択される傾向が強く、一貫性を破壊する方向の選択肢が選択される傾向が弱くなる、という傾向が強い」ということが示唆されている¹³⁾。このことから、人々の持つ自己物語が、公共政策の阻害要因となる可能性が考えられる。また、公共政策が適切に実施されるためには、技術や理論の開発はもちろんのこと、まちを良くしようと考える意志、すなわち「活力」を促すことが最大の課題であるという指摘があり¹⁴⁾、その課題解消のために物語を活用した実践描写研究が行われている^{例えは15)}。

以上のような物語に関する知見を踏まえるならば、物語を用いたコミュニケーションは、公共政策における望ましい政治心理の醸成を企図する上においても、効果的な影響を及ぼすことが期待される。

川端ら(2014)は、この点に着目し、公共政策を題材とした物語型情報を用いたコミュニケーションの効果を定量的に計測するために、リニア新幹線の建設を題材として、物語性の強い政策シナリオと物語性の弱い政策シナリオを作成し被験者に与え、両者の読了後のシナリオの情報に対する印象の鮮明さ、納得感、関心、当事者意識（以下「シナリオ読了効果」という）を比較する実験（以下「シナリオ実験」と言う）を行った¹⁶⁾。さらに、その心理的効果は全ての人に同じように作用するとは限らず、物語を伝える能力や、物語を理解する能力、物語に対する趣向性、日常生活における物語に対する接触の頻度といった物語に対する個人の資質や経験（以下「物語志向性」という）によって異なると考え、「公共政策

に関する情報を物語型性の強い文章として伝達する効果は、情報の受け手の物語志向性が高いほど顕著に表れる」という仮説を指定し検証を行った。その結果、当該仮説は支持されたものの、想定していた物語志向性の4つの尺度のうちの1つの下位尺度である「ナラティブコンテンツ経験度」の信頼性係数 α が0.279と低い値を示し、尺度として改善の余地が残されたと指摘している¹⁰⁾。

(3)本研究の目的

本研究では、既往研究での課題を踏まえ、改めて、物語志向性の尺度を構成し、以下の仮説を検証することを通じて公共政策における人々の政治心理の形成における物語型コミュニケーションの効果と個人の物語志向性の関係性を実証的に明らかにすることを目的とする。

仮説：公共政策に関する情報を物語性の強い文章として与えた場合の効果（当該政策に対する納得感や関心の向上度合い）は、情報の受け手の物語志向性が高いほど、より顕著に表れる。

2. 物語志向性の構成

(1)調査概要

本調査は、物語志向性尺度の構成を目的として、インターネット調査会社を通じて全国のモニター（全520人、平均年齢44.50歳、年齢標準偏差13.69歳、20代から60代までの各年代の構成人数と男女比が等しくなるように選定）を対象に実施された（平成26年9月10日から平成26年9月11日の2日間に実施）。各調査項目に対して、「全く当てはまらない」から「非常に当てはまる」までの7件法で回答を要請した（1点：全く当てはまらない、7点：非常に当てはまる）。

(2)調査項目の検討

川端ら(2014)¹⁰⁾を踏まえ、物語志向性尺度を計測するための調査項目を検討した。川端らは、物語志向性が、物語的に情報を人に伝える能力を意味する「ナラティブ伝達能力」、受け取った情報を物語的に理解する能力を意味する「ナラティブ感得能力」、日常における物語型のコミュニケーションの実践経験を意味する「日常ナラティブ経験度」、日常における小説や映画などの物語型コンテンツへの接触経験の程度を意味する「ナラティブコンテンツ経験度」という4つの尺度から構成されることを想定していた。

信頼性分析を行った結果、4つの下位尺度のうち「ナラティブコンテンツ経験度」の信頼性係数 α が.279となり、それ以外の3つの尺度の信頼性係数 α は十分な水準であった（ $\alpha = .651$ から.886）ことが報告されている。

そこで本研究では、物語志向性が「ナラティブ伝達能

力」, 「ナラティブ感得能力」, 「日常ナラティブ経験度」の3つの概念から構成されるものと考え、川端らの実験データに基づき、物語志向性尺度の構成を再考することとした。まず、川端らが物語志向性として用いた23個の項目に対して因子分析を行った。その結果、川端らが初めに設定した物語志向性の4つの構成概念の内、著しく低い信頼性を示していた「ナラティブコンテンツ経験度」は「ナラティブ感得能力」に包摂される構成概念であることが示唆された。続いて、各因子の構成概念に対して一貫した解釈を行うために、Bruner¹⁷⁾が提唱した認知形式としての「物語モード」という概念に基づいて、物語志向性の3つの因子の認知的役割をそれぞれ整理すると、「ナラティブ伝達能力」は「他人を物語モードに入らせる上手さについての能力や傾向」を(以下、「物語誘引力」と呼称)、「ナラティブ感得能力」は「自分自身が物語モードに入りやすいという能力や傾向」(以下、「物語感得力」と呼称)を、「日常ナラティブ経験度」は「他人と一緒に物語モードに浸ることで社会関係をうまく構築していく能力や傾向」(以下、「物語共有傾向」と呼称)を反映する因子であると解釈することができる。

本研究では、以上に述べた既往研究の実験データから得られた物語志向性尺度を構成する3つの下位尺度の調査項目について、以下の観点からさらなる見直しを行った。まず、自分自身が物語モードに入らなければ、物語

的に情報を伝達し他人を物語モードに入らせたり、物語モードによって生じる世界を他人と共有したりできないと考えられる。このことから「物語感得力」は「物語誘引力」や「物語共有傾向」に比べて、物語志向性のより基礎的な構成概念であると考えられる。よって、より適切な尺度項目を選定するために質問項目に「小説や映画などの登場人物に感情移入してしまい、自分のことのように嬉しくなったり悲しくなったりすることがある」や「小説や映画などのストーリーが、自分の人生にとって大きな意味を持つと感ずることがある」など4項目を新たに加え、他の尺度よりも多くの項目を設定することとした。また、適宜文言を簡潔にしたり文章を短くしたりするなどの修正を加えた。具体的には、例えば「文字の情報しかなくても、その描写内容を鮮明にイメージすることができる」という項目を「小説を読むとき、登場人物や情景を鮮明にイメージすることができる」と修正した。以上より、物語志向性に関する質問群として、「物語誘引力」を8項目、「物語感得力」を14項目、「物語共有傾向」を8項目設定した。

(3) 分析結果

a)データ整理

分析を行う前に、2つ以上の下位尺度に対して同じ番号のみを連続して回答していた10サンプルを不正回答として除外した。そのため、これ以降は全510サンプル

表-1 物語志向性の因子分析の結果

No.	項目	F1	F2	F3	共通性
1	簡単な「たとえ話」をすることで、相手にわかってもらえることが多い。	.610	.147	-.062	.437
2	少し経緯がややこしい出来事であっても、全体を簡単に要約して伝えるのは得意だ。	.907	.061	-.205	.753
3	過去の出来事を思い出し、時間の流れに沿ってくわしく説明するのが得意だ。	.878	.000	-.057	.732
4	会話の中で、「おもしろいエピソード」で人の関心をつかむことが多い。	.735	-.089	.190	.628
5	「なるほど!」と思わせるような話の展開や筋書きを考えるのが、我ながら得意だと感じる人が多い。	.765	-.137	.183	.640
6	人に何かを説明するときに、自分の経験談を交えることが多い。	.516	.082	.208	.456
7	「起承転結」や「振り」と「落ち」のように、構成や展開をきちんと意識して話すことが多い。	.792	-.030	-.020	.596
8	人を説得して何かをさせようとするときは、「こうすれば、こうなるだろう」というストーリーを具体的に説明する。	.755	.110	-.076	.605
9	分かりにくい話でも、たとえ話をされると「なるほど」と腑に落ちることが多い。	.202	.368	.007	.456
11	小説を読むとき、登場人物や情景を鮮明にイメージすることができる。	.160	.682	-.149	.244
12	小説や映画などを鑑賞するとき、その作品の世界にどっぷり入り込んでしまう方である。	-.107	.860	-.014	.501
13	人の経験談や教訓を聞いて、自分自身の生活や人生の中でも生かすことができる。	.234	.466	-.006	.661
16	小説や映画などの作品を鑑賞するのが好きだ。	.026	.528	-.028	.363
18	学校の国語の授業では、評論文よりも物語文の読解が得意だった。	.037	.487	-.003	.279
19	小説や映画などの登場人物に感情移入してしまい、自分のことのように嬉しくなったり悲しくなったりすることがある。	-.170	.760	.154	.253
21	小説や映画などのストーリーが、自分の人生にとって大きな意味を持つと感ずることがある。	.052	.524	.217	.598
23	「最近あった身近な出来事」について、家族や友人に長々と話してしまうことがある。	.023	.167	.538	.409
24	家族や友人が、昔話や思い出話を語っているのを聞くのは楽しい。	-.078	.161	.446	.254
26	友人や知人についてのうわさ話を盛りにすることがよくある。	-.047	-.008	.707	.470
27	つい、人の昔話を聞き出そうとしてしまう。	-.062	-.041	.605	.322
30	自分の人生や人間性について語るとき、よく引き合いに出す過去のエピソードがある。	.216	-.124	.628	.478
固有値		5.932	4.611	3.586	
因子間相関		F1	F2	F3	
		F1	—		
		F2	.436**	—	
		F3	.412**	.433**	—

***p<.01, **p<.05, *p<.1

※F1,F2,F3は因子負荷量を表す

表-2 物語志向性実験の信頼性係数 α と記述統計量

尺度	α	n	M	SD
物語誘引力	0.917	510	3.99	1.08
物語感得力	0.831	510	4.39	0.86
物語共有傾向	0.745	510	3.89	0.95

を分析に用いることにする。なお、調査項目のうち、逆転項目として尋ねていた項目は得られたデータの数値を逆転し、以降の分析に用いている。

b) 因子分析

物語志向性に関する質問群 30 項目について因子分析（最尤法）を実施した。固有値は、第 1 因子から順に、8.387, 2.826, 2.555, 1.629, 1.295, 1.077…と減衰していたため、3 因子解が適当であると判断した。そこで、これら 3 因子について、因子同士が相関していることも考慮し、プロマックス回転を施した。そして、因子負荷量の絶対値が複数の因子に対して 300 を超える項目、および共通性が 200 を下回る項目を除き、再度、因子分析を行うことを繰り返した。その結果を表-1 に示す。因子分析の結果、本実験で当初想定していた通りの 3 因子の構造が見られた。

まず、表-1 の F1 因子は“他人を物語モードに入らせる上手さについての能力”である「物語誘引力」を、F2 因子は“自分自身が物語モードに入りやすいという傾向”である「物語感得力」を、F3 因子は“他人と一緒に物語モードに浸ることで社会関係をうまく構築していく傾向”である「物語共有傾向」を表す因子であると考えられる。以上の分析に基づいて、「物語誘引力」を F1 の 8 項目、「物語感得力」を F2 の 8 項目、「物語共有傾向」を F3 の 5 項目の加算平均から、それぞれの尺度を構成した。信頼性分析の結果および記述統計量（回答者数 n, 平均値 M, 標準偏差 SD）を表-2 に示す。信頼性係数 α は、「物語誘引力」では 0.917, 「物語感得力」では 0.831, 「物語共有傾向」では 0.745 となり、一定程度の内的整合性が認められたものと考えられる。また、尺度間の相関係数は 0.412 から 0.436 と中程度の相関が見られた。

3. 仮説検証

(1) 実験概要

本実験は、本研究で措定した仮説を検証するために、「高知県黒潮町の防災計画」を題材とする政策シナリオを、後述する物語の定義に基づき、物語型のシナリオと説明文型のシナリオの 2 種類を作成し、その読了効果を計測する調査を行った。

実験の流れとしては、初めに、個人属性や態度変容の度合いを計測する項目への回答を要請した。次に、シナリオの読了を要請した。最後に、再び態度変容の度合い

を計測する項目、シナリオ読了効果を計測する項目、物語志向性を計測する項目への回答を要請した。

(2) シナリオの作成

さて、シナリオを作成するにあたり、如何なる要素を有する文章が物語と見なされるのか、という物語の定義づけが必要となる。本研究では、以下に述べる物語の定義に関する既往研究を参照することとする。

まず、アリストテレース¹⁸⁾は、悲劇を「一定の大きさをそなえた完結した一つの全体としての行為の再現である」と定義し、その全体とは「初め、中間、終わり」という時間軸に沿った構造のことを指している。次に、神話学者 Campbell¹⁹⁾は神話に共通する「非日常的局面への旅立ち、問題の発生とその解決の連続、日常世界への帰還」という英雄の冒険（ヒーローズ・ジャーニー）になぞらえられる構造を見出しており、これもある種の物語の形であると言える。市井の人々の自伝的物語を収集しパターンを分析した Labov & Waletzky の研究²⁰⁾においても、多くの物語は導入から展開を経て終結に至る構成であるとされているし、Thomdyke らによる実証的研究⁹⁾においても、問題の発生とその解決という構成が物語の基本構造であるとされている。以上から本研究では、物語性の有るプロットとして、悲劇の構造および神話の構造を組み合わせた“目標達成-英雄物語型”プロットを用いることとした。現段階では「物語の典型的なプロット」の類型研究は不足していると言え、どのようなプロットでシナリオを構成するのが妥当であるかに関する詳細かつ包括的な検討は今後の重要な課題となるが、上記のような理由から、少なくとも目標達成-英雄物語型のプロットについては、典型的・標準的なものの一つであると仮定することに一定の妥当性があると考えられる。

一方、認知的側面からからの物語研究を行った Bruner は、人間の認知能力における物語の役割を研究するためのアプローチとして、互いに還元不可能な 2 つの思考様式を提案した¹⁷⁾。1 つは、論理-科学的思考様式であり、それは、「良い理論、簡潔な分析、論理的証明、妥当な議論、理路整然とした仮説に導かれた経験的発見」をもたらすとされている。もう 1 つは、物語様式（以後、「物語モード」とする）であり、このモードにおいて人間は「みごとにストーリー、人の心を引きつけるドラマ、（それが真実ではないとしても）信じるに足る歴史的説明」を経験するとされている。ここから、読者を物語モードに引き込むような文章を物語と定義することも可能であるように考えられる。

あるいは、物語の定義の問題からは若干離れるが、人間が物語を理解する際の表象（心的イメージ）の形成プロセスを明らかにしようとする研究からは、物語の本質を考察する上でいくつかの示唆が得られる。テキストを

読解する際に、読者は、表層的表象、テキストベース、状況モデルという 3 つの水準の表象を形成するとされる²¹⁾。Zwaan& Radvansky²²⁾は、これらの中で最も深い理解に関わる「状況モデル」が、空間（以後、「空間性」）、因果関係（「因果性」）、意図（「意図性」）、主人公と対象の同一性（「主体と対象の同一性」）、時間（「時間性」）という 5 つの「状況的次元」から構成されていると仮定している。León&Peñalba²³⁾は、物語文と説明文における因果関係の働きに関する研究のレビューを行い、物語文においては「意図性」が重視され、説明文では「因果性」が重視されるとの考えを示している。井関・川崎²⁴⁾は、物語文の読解においては説明文の読解とは異なり、「意図性」が状況モデルの構築に大きく寄与していることを明らかにした。ただし、同実験において、物語文では、「意図性」だけでなく「因果性」も状況モデルの構築に大きく寄与していることを実証的に明らかにしている。その他の先行研究^{例えば 25) 26)}では、他の次元に比べて「空間性」が状況モデルの体制化などに有意な寄与を与えていないことを示している。そのことから、井関・川崎²⁴⁾は物語文と説明文における「空間性」の機能の違いを検証し、物語文において、状況理解に対する「空間性」の及ぼす効果は「時間性」や「意図性」に比べて小さかったことを実証的に明らかにしている。

以上のように、物語の定義は研究者ごとに差異があり、統一的なものは示されていないものの、本研究では、既往研究より状況モデルの 5 つの次元うち、「空間性」は他の次元に比して状況理解に及ぼす負荷は少ないことと、「因果性」はその影響について一貫した結果が得られていないことを踏まえ、「空間性」、「因果性」を除く「主体と対象の同一性」、「時間性」、「意図性」が物語性の要素として重要であるとした。なお、「主体」なくしてはその「意図」が描写できないことから「主体と対象の同一性」と「意図性」を合わせて「主体意図性」と捉えることとした。よって、本研究では、主体意図性および「時間性」の二つを「物語性」の主要な要素であると理解し、“「意図をもった主体」が具体的にどのような行動をしたかが、目標達成-英雄物語型のプロットに沿って提示されている”ようなシナリオを「物語型シナリオ」と定義する。

a)シナリオ題材の選定

シナリオは、黒潮町における防災の取り組みについて、その主要な役割を担った町長や町役場職員に対するヒアリングに基づき物語描写を行った佐藤らの研究²⁷⁾を基に、本研究における物語の定義に沿うように構成した。当該テーマを選定した理由は、大規模地震のように将来的に発生確率が高いと指摘されている一方で、具体的にいつ発生するのかは判然としない災害に対する防災においては、広範な合意を長期に渡って持続させる必要があ

り、それ故、コミュニケーション技法を工夫することが有効であると考えられるためである。

b)物語型シナリオの作成

まず、佐藤らの作成した物語描写研究を元に、各条件のベースとなる共通のシナリオを作成した。佐藤らは、物語の定義を「(有意味な終点に向けて)諸出来事を取捨選択し構造化したもの」としていた。本研究では、2(1)にて述べた物語型シナリオの定義に沿うように、佐藤らの物語描写を情報ユニット毎に分類し、情報ユニットからシナリオを再構成した(表-3)。その際、文章に、行動の主体を明記したり、時間を表す表現を加えるなどの修正を行った。作成した物語型シナリオについては、付録に示す。

c)非物語型シナリオの作成

非物語型シナリオとして、説明文型の構造を持つシナリオ（以下、「説明文型シナリオ」）を作成した。説明文型の構造を選択した理由は、井関・川崎²⁴⁾によって物語と説明文における状況モデルの 5 つの次元の寄与の違いが実証的に明らかにされており、物語文との比較に説明文を用いるのが適当であると判断した。このことに加え、住民説明などの公共政策に関する情報伝達には往々にして説明文が用いられており、説明文と比較した際の物語文の効果を実証的に明らかにすることは有益である

表-3 本実験で使用した物語型シナリオの構造

- 1 設定：黒潮町の紹介
- 2 非日常世界への移行：東日本大震災後、黒潮町における南海地震の被害予想が発表される
- 3 全体の目標設定①（冒険の始まり）：大西町長の決意
- 4 全体の目標設定②（具体化）：大西町長の紹介と具体的な決意の内容
- 5 障害発生①：役場の人手不足
- 6 障害解決①：職員地域担当制
- 7 障害発生②：防災予算の不足
- 8 障害対処②：国へのはたらきかけ
- 9 障害解決②：国の予算の獲得
- 10（新たな目標設定と）障害発生③：「犠牲者ゼロ」へと目標の引き上げ
- 11 障害対処③：住民1人1人の「避難カルテ」を作成
- 12 障害解決③：避難カルテの積み上げによる体系立ったシミュレーション
- 13 全体の目標の達成：「逃げない」から「あきらめない」へ
- 14 コーダ（締めくくり）：黒潮町ではここ数年で防災意識が非常に高まった
- 15 現在への視点の引き戻し

表-4 本実験で使用した説明文型シナリオの構造

- 1 全体の場面設定：黒潮町と大西町長の紹介
- 2 テーマの導入：東日本大震災後、黒潮町では南海地震に対するあきらめが広がった
- 3 結論（主張したいこと）：黒潮町ではここ数年で防災意識が非常に高まった
- 4 取り組み①：職員地域担当制
- 5 取り組み①の理由および背景
- 6 取り組み②：国の予算の獲得
- 7 取り組み②の理由および背景
- 8 取り組み③：避難カルテの積み上げ
- 9 取り組み③の理由および背景
- 10 黒潮町の取り組みを支えるもの（「以上のような取り組みの全てを支える背景として、次の3つを挙げることができる。」との説明を加える）
- 11 全体的背景1：取り組みを支える「町役場の決意」
- 12 全体的背景2：「避難放棄ゼロ」という目標
- 13 全体的背景3：ゆるやかな防災

と考えたためである。

そこで、上述の物語型シナリオの全体の配列を見直し、説明文型の構造になるように再構成した(表-4)。本研究における説明文型の構造としては、“結論としての事実を最初に述べ、次にその理由を述べる”というものである。これは、筆者の知る限り説明文についての明確な定義は存在せず、高等学校学習指導要領解説²⁹⁾においては、論理的な文章の一つに説明文が含まれているためである。

文章の表現に関しては、井関らの研究に基づき「時間性」および「主体意図性」を弱める操作を行った。具体的には、例えば「2011 年 3 月 11 日、東北地方を中心とする東日本大震災が発生した。(中略)それから 20 日後の 3 月 31 日、今度は政府の中央防災会議が、南海地震についての被害予想を発表」という表現を「2011 年 3 月 11 日、東北地方を中心とする東日本大震災が発生した。(中略)3 月 31 日、政府の中央防災会議が、南海地震についての被害予想を発表」とした。作成した説明文型シナリオについては、付録に示す。なお、物語型シナリオと説明文型シナリオの情報量に差が出ないように留意してシナリオの操作を行った。なお、シナリオの文字数は物語型、説明文側の順に、2778 文字、2758 文字である。

(3)調査対象

本実験は、インターネット調査会社を通じて、全国のモニター(全 320 人、物語型/非物語型のシナリオに 20 代から 50 代までの各年代の構成人数と男女比が等しくなるように各 160 人ずつ選定、平均年齢 39.86 歳、年齢標準偏差 13.69 歳)を対象にアンケートを用いた調査(平成 26 年 12 月 25 日)を実施した。

(4)調査項目

a)従属変数の検討

従属変数として、川端ら¹⁰⁾は文章に対する印象の鮮明さ(=印象鮮明性)、政策に対する納得感(=納得性)、政策に対する当事者意識(=自我関与性)、政策に対する関心(=関心向上性)を計測していた。

本実験における従属変数としては、既往研究⁷⁾で計測されていた物語の登場人物に対する好意的な評価(以下、「人物評価」と呼称)を新たに加えた。一方、川端らが従属変数として用いていた「印象鮮明性」についてはシナリオを読了後の効果を計測しているというよりは、シナリオを読了中の現象を計測していると考えられるため、今回の実験からは除外した。以上より、本実験におけるシナリオ読了効果を計測する従属変数は、「人物評価」、「納得性」、「関心向上性」、「自我関与性」の 4 つの尺度を用いた(表-5)。全ての項目に対して「1 点：全く

当てはまらない」から「7 点：常に当てはまる」までの 7 件法で回答を要請した。

また、本実験ではシナリオの読了前後での防災に対する態度変容の度合いを計測する項目として、「防災関心度」、「防災政策必要性認識度」、「許容防災税率」を加えることとする(表-6)。なお、これらの尺度については、シナリオ読了の前後で同じ質問への回答を要請し、読了後の値から読了前の値を引いた値を尺度の得点として用いることとした。「防災関心度」と「防災政策必要性認識度」に対しては「1 点：全く当てはまらない」から「7 点：常に当てはまる」までの 7 件法で、「許容防災税率」に対しては、パーセントでの回答を要請した。

b)物語志向性尺度

3章で構成した「物語誘引力」、「物語感得力」、「物語共有傾向」の 3 つの尺度を用いた(表-1)。全ての項目に対して「1 点：全く当てはまらない」から「7 点：常に当てはまる」までの 7 件法で回答を要請した。

表-5 シナリオ読了効果の質問項目

人物評価	
1	黒潮町の大西町長は、立派なリーダーであると感じた。
2	黒潮町役場の職員は、公務員としての使命をまっとうしていると感じた。
3	黒潮町の住民たちの努力は、尊敬に値すると感じた。
納得性	
1	この文章の内容は、とても腑に落ちるものだった。
2	この文章は理解しやすかった。
3	この文章について、とくに疑問に思うことはない。
関心向上性	
1	この文章を読む前よりも、地震対策への関心が強くなった。
2	この文章を読んで、黒潮町や大西町長の取り組みについてもっと詳しく知りたいと思った。
3	この文章を読む前よりも、防災は大事だと思うようになった。
自我関与性	
1	この文章を読んで、自分も大地震や津波の危険と無縁ではないだろうと感じた。
2	この文章を読んで、災害のリスクが高い地域のために、自分にもできることがあれば協力したいと感じた。
3	この文章で描かれている黒潮町の困難な状況は、人ごととは思えない。

表-6 態度変容に関する質問項目

防災関心度	
1	自分や家族の住んでいる地域の地震対策に関心がある。
2	日本全国の、自分とは関係がない地域の地震対策にも関心がある。
3	地震だけでなく、台風や雪崩などを含め災害一般への対策についても深く知りたい。
防災政策必要性認識度	
1	日本政府は、近い将来の発生が予想される南海トラフ地震(東海地震・東南海地震・南海地震)への対策を急ぐべきであると思う。
2	南海地震により 30 メートルを超える津波が到来するといわれる高知県・黒潮町のような地域に対しては、国が十分な財政支援を行う必要があると思う。
3	災害大国である日本では、政府も国民も、防災には最優先で取り組まなければならないと思う。
許容防災税率	
1	防災予算に関するあなたの考え方について、もう一度お伺いします。今後、仮に「防災税」のような新たな税制が国に設けられ、所得のある全ての国民から毎月税金が徴収されて、全国各地の防災事業の財源にあてられるとします。手取りの給与の何%までなら、「全国の防災」のための徴収に賛成しますか?/%

(5)実験結果

a)データ整理

まず、「防災関心度」,「防災政策必要性認識度」,「許容防災税率」に関しては,読了後のスコアから読了前のスコアを引いたものを,それぞれ「防災関心度の増分」「防災政策必要性認識度の増分」「許容防災税率の増分」と命名し,これらを「態度変容」の度合いを示す項目として扱うこととした。なお,マトリックス型質問の全ての項目に同じ番号をマークしたデータ及び,全体のサンプルのうち回答時間の短い上位3%の回答者はインターネット調査会社からの納品段階で除外されている。

b)信頼性分析と基本統計量

まず,信頼性分析の結果を表-7に示す。全ての尺度について十分な信頼性が確保されていることから,以降の分析では,態度変容を表す項目以外は各尺度の可算平均を尺度の得点として用いることとした。次に,各シナリオ群毎の基本統計量(回答者数 n , 平均値 M , 標準偏差 SD)を表-8に示す。いずれの尺度においても,物語性有り,すなわち物語型シナリオを読了した回答群が,説明文型シナリオを読了した回答群よりも,高い得点を示している。

c)仮説検証

本研究で措置した仮説,即ち,「公共政策に関する情報を物語性の強い文章として与えた場合の効果(当該政策に対する納得感や関心の向上度合い)は,情報の受け手の物語志向性が高いほど,より顕著に表れる」の妥当性を検証する。物語型コミュニケーションに対する物語志向性の影響を検証するために,「シナリオ読了効果」「態度変容」を従属変数,「物語性の有無」を要因,「物語誘引力」「物語感得力」「物語共有傾向」を共変量とした共分散分析を行った(表-9)。分析の結果,「物

語誘引力」と「物語性」の交互作用が「納得性」,「関心向上性」,「自我関与性」に対して有意となった(そ

表-7 シナリオ読了実験の信頼性分析結果

尺度	α
防災関心度_pre	0.833
防災政策必要性認識度_pre	0.918
人物評価	0.927
納得性	0.814
関心向上性	0.859
自我関与性	0.858
物語誘引力	0.926
物語感得力	0.897
物語共有傾向	0.808
防災関心度_post	0.867
防災政策必要性認識度_post	0.922

表-8 シナリオ読了実験の記述統計量

尺度	物語性有り($n=160$)		物語性無し($n=160$)	
	Mean	SD	Mean	SD
人物評価	4.88	1.17	4.65	1.08
納得性	4.72	1.05	4.48	0.91
関心向上性	4.63	1.11	4.40	0.92
自我関与性	4.71	1.15	4.58	0.89
物語誘引力	4.12	1.13	4.05	0.97
物語感得力	4.65	0.97	4.39	0.84
物語共有傾向	4.11	0.99	3.92	0.90
防災関心度_pre	4.38	1.23	4.44	1.00
防災政策必要性認識度_pre	4.81	1.28	4.77	1.12
許容防災税率_pre	4.10	1.2	3.34	8.02
防災関心度_post	4.77	1.11	4.66	1.00
防災政策必要性認識度_post	5.10	1.19	5.01	1.09
許容防災税率_post	5.78	1.5	3.94	8.29
防災関心度の増分	0.39	1.09	0.23	0.93
防災政策必要性認識度の増分	0.29	1.15	0.24	1.04
許容防災税率の増分	1.68	6.20	0.59	6.30

表-9 物語性を要因, 物語志向性を共変量とした共分散分析の結果

	物語誘引力×物語性			物語感得力×物語性			物語共有傾向×物語性		
	F($n1,n2$)=	F値	p	F($n1,n2$)=	F値	p	F($n1,n2$)=	F値	p
人物評価	F(1,312)=	1.259	.263	F(1,312)=	.043	.837	F(1,312)=	1.323	.251
納得性	F(1,312)=	6.508	**	F(1,312)=	.144	.704	F(1,312)=	.834	.362
関心向上性	F(1,312)=	9.531	***	F(1,312)=	.018	.893	F(1,312)=	4.820	**
自我関与性	F(1,312)=	5.961	**	F(1,312)=	.020	.888	F(1,312)=	.131	.718
防災関心度の増分	F(1,312)=	.447	.504	F(1,312)=	.501	.479	F(1,312)=	.343	.559
防災政策必要性認識度の増分	F(1,312)=	.077	.781	F(1,312)=	.444	.505	F(1,312)=	.243	.623
許容防災税率の増分	F(1,312)=	1.559	.213	F(1,312)=	.046	.830	F(1,312)=	.151	.698
*** $p<.01$,** $p<.05$,* $p<.1$									
	物語誘引力の主効果			物語感得力の主効果			物語共有傾向の主効果		
	F($n1,n2$)=	F値	p	F($n1,n2$)=	F値	p	F($n1,n2$)=	F値	p
人物評価	F(1,312)=	21.028	***	F(1,312)=	96.050	***	F(1,312)=	3.474	*
納得性	F(1,312)=	10.479	***	F(1,312)=	64.866	***	F(1,312)=	.953	.330
関心向上性	F(1,312)=	14.266	***	F(1,312)=	92.958	***	F(1,312)=	17.460	***
自我関与性	F(1,312)=	8.899	***	F(1,312)=	70.145	***	F(1,312)=	10.351	***
防災関心度の増分	F(1,312)=	.021	.886	F(1,312)=	6.994	***	F(1,312)=	4.366	**
防災政策必要性認識度の増分	F(1,312)=	.702	.403	F(1,312)=	7.562	***	F(1,312)=	.905	.342
許容防災税率の増分	F(1,312)=	.408	.524	F(1,312)=	.094	.760	F(1,312)=	.937	.334
*** $p<.01$,** $p<.05$,* $p<.1$									

れぞれ, $F(1,312)=6.51$, $p<.05$, $F(1,312)=9.53, p<.05$, $F(1,312)=5.96, p<.05$). また, 「物語共有傾向」と「物語性」の交互作用が「関心向上性」に対して有意となった ($F(1,312)=4.82, p<.05$).

次に主効果について確認すると「物語誘引力」が「人物評価」に対して有意な主効果が見られた ($F(1,312)=21.03, p<.01$). 「物語感得力」においては, 「人物評価」「納得性」「関心向上性」「自我関与性」「防災関心度の増分」「防災政策必要性認識度の増分」に対して有意な主効果がみられた (それぞれ, $F(1,312)=96.05$, $p<.01$, $F(1,312)=64.87, p<.01$, $F(1,312)=92.96$, $p<.01$, $F(1,312)=70.15$, $p<.01$, $F(1,312)=6.99, p<.01$, $F(1,312)=7.56, p<.01$). 「物語共有傾向」においては, 「人物評価」「自我関与性」「防災関心度の増分」に対して有意な主効果が見られた (それぞれ, $F(1,312)=3.47$, $p<.10$, $F(1,312)=10.35$, $p<.01$, $F(1,312)=4.37, p<.05$).

以上の結果は, 情報を物語化して表現し伝達したり説得したりする能力・傾向が高い人が物語性のある文章に触れた場合, 文章のテーマに対する納得や関心や当事者意識が高まるということを示唆するものであり, 物語志向性のうち「物語誘引力」においては, 仮説を支持するものである.

5. 考察

仮説検証の結果から物語志向性の特徴の解釈を行い, そこから公共政策への応用に関する考察を試みる.

まず, シナリオ読了効果に対する物語性と物語志向

性の交互作用を見ると, 「物語誘引力」の高い人は納得や関心, 自我関与性に対して交互作用が有意となっている. また, 「物語共有傾向」については, 関心向上性に対する交互作用が有意となっている. 一方「物語感得力」については, 物語性との交互作用は見られず, 主効果が全てのシナリオ読了効果に対して強く有意となっている. この結果から, 物語志向性が物語の効果に及ぼす影響は, 3 つの物語志向性の特徴によって異なることが分かる. 即ち, 3 つの物語志向性尺度の中で「物語誘引力」は, 物語型の情報提示による政治心理醸成効果を最も強く引き出すものと考えられる. 具体的には, 「物語誘引力」の高い人は, 説明文型ではなく, 物語型の情報提示をすることによって, 情報に対する納得や関心, 自我関与性が高まることが期待される. また, 「物語共有傾向」の高い人は, 説明文型の情報提示よりも物語型の情報提示をすることによって, 関心が高まることが期待されるが, 「物語共有傾向」が低い人においては, 物語型の情報提示であっても, 説明型の情報提示であっても, 「関心向上性」以外の向上は期待できないものと考えられる. 一方, 「物語感得力」と「物語性」の交互作用は確認されなかった. この点について, 物語型シナリオと説明文型シナリオの読者毎に, 「物語感得力」の高低(全 320 サンプルの平均値と比べその高低によりグループ分けを行った. なお, 平均値と同じ値を示した人は分析から除外した)を要因, 「シナリオ読了効果」と「態度変容」(「許容防災税率」を除く)を計測する項目を従属変数とした t 検定を行った(表-10, 表-11). その結果, どちらの

表-10 物語型シナリオを読了した人の物語感得力の高低別の基準統計量および t 検定の結果

	物語感得力 低			物語感得力 高			t 値
	n	M	SD	n	M	SD	
人物評価	64	4.313	1.145	94	5.280	1.023	-5.442 ***
納得性	64	4.281	1.021	94	5.021	0.970	-4.566 ***
関心向上性	64	4.041	0.981	94	5.043	1.013	-6.218 ***
自我関与性	64	4.188	1.096	94	5.067	1.061	-5.016 ***
防災関心度の増分	64	0.151	1.077	94	0.557	1.091	-2.316 **
防災政策必要性認識の増分	64	0.000	1.032	94	0.485	1.193	-2.721 ***

*** $p<.01$, ** $p<.05$, * $p<.10$
すべての項目で等分散を仮定しない

表-11 説明文型シナリオを読了した人の物語感得力の高低別の基準統計量および t 検定の結果

	物語感得力 低			物語感得力 高			t 値
	n	M	SD	n	M	SD	
人物評価	91	4.260	1.014	64	5.141	0.955	-5.506 ***
納得性	91	4.231	0.854	64	4.755	0.883	-3.688 ***
関心向上性	91	4.066	0.823	64	4.807	0.860	-5.378 ***
自我関与性	91	4.256	0.790	64	4.990	0.846	-5.457 ***
防災関心度の増分	91	0.107	1.068	64	0.406	0.699	-2.107 **
防災政策必要性認識の増分	91	0.091	1.206	64	0.459	0.728	-2.359 **

*** $p<.01$, ** $p<.05$, * $p<.10$
すべての項目で等分散を仮定しない

シナリオの読者においても全ての項目で、「物語感得力」が高い人のほうが有意に高い得点を示していることが確認され、「物語感得力」が低い人においては、物語型、説明型いずれの情報提示においても関心や納得といった政治心理の醸成が困難であるという可能性を示唆するものと言える。

6. 結論

本研究では、公共政策における政治心理の醸成における物語型コミュニケーション効果と個人の物語に対する志向性との関係性を明らかにすることを目的として、シナリオ実験を行った。その結果、物語型コミュニケーションの効果は、人々の物語志向性の特徴によって異なるという可能性が示唆された。すなわち、他人を物語に引き込む能力としての「物語誘引力」が高い人々においては、公共政策を物語的に伝えることが、当該政策に対する関心や納得感、当事者意識の醸成に有効である可能性、また、物語的エピソードを共有することで社会的な関係を構築・維持する傾向としての「物語共有傾向」が高い人々においては、公共政策を物語的に伝えることが、当該政策に対する関心の醸成に有効である可能性が明らかとなった。一方で、物事を物語的に把握する能力としての「物語感得力」の低い人々においては、公共政策を物語的に伝えた場合、説明文型で伝えた場合、いずれにおいても、政治心理の醸成は期待できないという可能性が実証的に示された。

以上の結果を踏まえるならば、公共政策における人々の政治心理の醸成を目指す上では、第一に、人々の「物語感得力」を高める方途を探る必要があるといえよう。その上で、人々の「物語誘引力」及び「物語共有傾向」を高めることが、公共政策をめぐる物語型コミュニケーション効果を一層高めるものと期待される。

付録

物語型シナリオ

タイトル「高知県・黒潮町の大津波対策」

地震対策への「あきらめ」

黒潮町は、高知県の西部に位置する人口約1万2000人の海沿いの町である。町は太平洋に面しており、90～150年周期で発生する南海地震によって、大きな津波被害を受けてきた歴史がある。南海地震は、今後30年以内に90%程度の確率で発生すると予想されており、大規模な被害が懸念されている。

2011年3月11日、東北地方を中心とする東日本大震災が発生した。報道される津波被害のあまりの大きさに、遠く離れた黒潮町の人々も、人ごととは思えず大きなショックを受けた。

それから20日後の3月31日、今度は政府の中央防災会議が、南海地震に

ついての被害予想を発表。最大震度は7、最短2分で到達する黒潮町の津波の高さは、街のほとんど全てを押し流す「最大34.4m」と予想された。この報道を受けた黒潮町では、「南海地震が来たら、助かるわけがない」というあきらめの声が瞬く間に広がったという。

大西町長の決意

黒潮町の大西勝也町長は、前年に39歳の若さで就任した気鋭の政治家である。彼もまた、他のすべての町民と同様に、中央防災会議の発表を知った途端に絶望的な心持ちとなったという。

発表があった3月31日は土曜日で、日曜日には町へ取材が殺到。翌月曜日は、新年度の仕事始めである。町長は「リーダーたる自分がここであきらめれば、町そのものが文字通り津波で消滅する」と考えて、日曜日の夜に「1人の人間も絶対殺さないための防災体制を作り上げる」という決意を固め、1枚の「訓示文」をしたためた。

そして月曜日の朝、役場の全職員に向けて「どうしても無いとあきらめるような発言は、その一切を禁止する」と述べ、「困難な道のりにはなるが、職員一同の奮起を要請する」で締めくくられる訓示文を力強く読み上げた。すると、あきらめムードが広がりつつあった町役場で、防災に向けた士気が一気に高まったという。

黒潮町の防災思想

その後大西町長は、まず、役場職員たちとともに確固たる「防災思想」を打ち立てることを目指した。そして5月10日、町役場は「第1次黒潮町の南海地震に対する基本的な考え方」を発表し、これが町としての防災思想の基本原則となった。この思想の根本に据えられたのは、「避難放棄者を出さない」という目標だった。

町役場の人手不足

ただし、思想や目標を示すだけで、住民からあきらめの気持ちが払拭されるわけではない。大西町長は、「住民の気持ちを前向きにするには、目に見える形の取り組みを素早く打ち出すことが大事だ」と考え、「避難道の整備」など具体性のある事業にすぐに取りかかることにした。

しかし「避難放棄者ゼロ」を目指すには膨大な取り組みが必要だ。これは町の防災担当職員の手に負える仕事ではなかった。

全職員が防災担当者に

すると役場内から「防災には町役場の全職員の力で取り組むべきではないか」との声が上がった。町長はその声をすぐに採用。全職員が地域別に担当を受け持つ「職員地域担当制」が導入された。

保育園の職員まで含めて、町役場の「全ての職員」が何らかの形で防災担当者となったのである。これはもちろん、各職員の業務量が増えることを意味しているが、反対の声は1つも出なかったという。

防災予算の不足

この制度の下、町内が61の地区に分けられ、全職員がどこかの地区の担当となった。それぞれの地区で防災のためのワークショップを開催し、役場職員と住民が一緒になって危険な場所を特定し、そのための

防災事業を1つ1つ検討していった。

しかし役場の試算によると、防災事業を全て実行するには約33億円もの予算が必要になることが分かった。黒潮町単独では、とても負担できる金額ではなかった。

国への働きかけ

そこで大西町長は、財政支援を獲得するために国へ働きかけることにした。月に2回程度は東京へ赴き、国交省などに黒潮町の実情を伝え、地方の防災活動を国が支援することの必要性を訴えた。また、すでにある国の補助制度などの情報も丹念に収集した。

その結果、町長の努力は実り、その年の秋の補正予算で、黒潮町の避難場所や避難道の整備に必要な事業費が確保されることとなった。

こうして具体的な作業が動き出し、避難道の整備などが進むにつれて「実際に逃げる時のイメージ」が思い描けるようになり、住民の「あきらめ」の気持ちも次第に緩和されていった。当初とは違って、「逃げよう」という意識を持つ住民が着実に増えてきたのである。

目標の引き上げ

さらに作業を進めた黒潮町は、1年ほどが経過した2013年1月31日に「第2次黒潮町南海地震・津波防災計画の基本的な考え方」をとりまとめた。そしてその際、防災の基本目標を、以前の「避難放棄者ゼロ」から「犠牲者ゼロ」へと引き上げた。

犠牲者「ゼロ」を目指すには、文字通り「全て」の住民が必ず逃げられるという確信を持つことが必要だ。しかしそれは相当に高いハードルだった。

住民1人1人の「避難カルテ」

そこで黒潮町役場は、全ての住民について、1人1人個別に「どうやって避難するか」を考えた「避難カルテ」を作成することにした。その作成にあたって「職員地域担当制」が活用された。すなわち、各地区の担当職員が、全ての住民とワークショップで直接細やかな相談をしながら、1人1人のカルテを作っていったのである。

このカルテの効果は絶大だった。住民1人1人が、「ここに行けば助かる」という明確なイメージを持てるようになった。そして役場は、これに基づいて町全体の避難計画のシミュレーションが綿密に行えるようになったのであった。

「逃げない」から「あきらめない」へ

こうした役場主導の防災の取り組みを進めているうちに、自主的に防災組織を結成して地域の避難路確保に励む住民も現れ始めた。また、学校や保育所など教育現場でも、震災に関する教育や避難訓練などの取り組みが活発に行われるようになった。

町役場の松本課長は、「当初は『逃げない』という声が多かったが、今は逆にそれが恥ずかしい状況になってきている」と語る。大西町長も「今ではほとんど、あきらめの声はない」と言い、町を挙げたここ数年の取り組みが実を結んでいることがわかる。

ゆるやかな防災

いつ起きるかわからない地震に備えるには、取り組みを長く継続する

ことこそが大事である。しかし防災というのは過酷な取り組みだ。大西町長は、「常に被害をイメージするような、辛い精神作業は続かない」「新しい避難道にちょっと登ってみようかなぐらいの感覚でなければ長続きはしない」という。松本課長も、「南海地震と向き合うのではなく、付き合うという感覚が大事だろう」という。

町長が「絶対にあきらめない」と決意したあの夜から始まった黒潮町の防災の取り組みは今、こうした「ゆるやかな防災」という形で、町全体にじつくりと浸透しつつあるのだった。

説明文型シナリオ

タイトル「高知県・黒潮町の大津波対策」

防災の取り組みが進む黒潮町

黒潮町は、高知県の西部に位置する人口約1万2000人の海沿いの町である。町長は2010年に39歳の若さで当選した気鋭の政治家、大西勝也氏が務めている。

町は太平洋に面しており、90～150年周期で発生する南海地震によって、大きな津波被害を受けてきた歴史がある。南海地震は、今後30年以内に90%程度の確率で発生すると予想されており、大規模な被害が懸念されている。

2011年3月11日、東北地方を中心とする東日本大震災が発生した。報道される津波被害のあまりの大きさに、遠く離れた黒潮町の人々も、人ごととは思えず大きなショックを受けた。

3月31日、政府の中央防災会議が、南海地震についての被害予想を発表。最大震度は7、最短2分で到達する黒潮町の津波の高さは、街のほとんど全てを押し流す「最大34.4m」と予想された。この報道を受けた黒潮町では、「南海地震が来たら、助かるわけがない」「地震が来ても逃げない」というあきらめの声が瞬刻に広がった。町へは、県外からの取材も殺到した。

しかし今の黒潮町では、「諦めるのは恥ずかしい」という状況である。町内にほとんどあきらめの声はない。役場主導の防災の取り組みが進むのと同時に、自主的に防災組織を結成して地域の避難路確保に励む住民も現れ始めている。学校や保育所など教育現場でも、震災に関する教育や避難訓練などの取り組みが活発に行われるようになっていく。

具体的な取り組み例

この変化は、町を挙げたここ数年の取り組みの結果もたらされたものであり、以下に3つ取り組みの例を挙げる。

取り組み1：黒潮町役場においては、全職員が地域別に担当を受け持つ「職員地域担当制」が導入されている。保育園の職員まで含めて、町役場の「全ての職員」が何らかの形で防災担当者となっているのである。これはもちろん、各職員の業務量が通常よりも増えることを意味しているが、反対の声は1つも出ていない。

取り組み1の背景：南海地震の被害予想発表後、黒潮町役場は「南海地震において、避難放棄者を出さないこと」を目標に掲げた。しかし

「避難放棄者ゼロ」を目指すには膨大な取り組みが必要で、これは町の防災担当職員の手に負える仕事ではないため、「防災には町役場の全職員の力で取り組むべきではないか」との考えから職員地域担当制が導入された。

取り組み2: 2011年秋の国の補正予算で、黒潮町の避難場所や避難道の整備に必要な事業費が確保された。この財政支援を受けて、黒潮町では具体的な作業が動き出し、避難道などが整備された。

その結果「実際に逃げる時のイメージ」が思い描けるようになり、住民の「あきらめ」の気持ちも次第に緩和された。当初とは違って、「逃げよう」という意識を持つ住民が着実に増えた。

取り組み2の背景: 国の財政支援は、黒潮町から国への働きかけによって獲得されたものである。月に2回程度は東京へ赴き、国交省などに黒潮町の実情を伝え、地方の防災活動を国が支援することの必要性を訴えた。また、すでにある国の補助制度などの情報も丹念に収集した。国に働きかけたのは、黒潮町に必要な防災事業の予算額が、黒潮町単独ではとても負担できる金額ではなかったからである。その金額は、次のような手順で見積もられた。町内が61の地区に分けられ、それぞれの地区で防災のためのワークショップが開催され、役場職員と住民が一緒になって危険な場所を特定し、そのための防災事業を1つ1つ検討した。そして経費の金額を役場が試算すると、総額で約33億円となった。

取り組み3: 黒潮町役場は、全ての住民について、1人1人個別に「どうやって避難するか」を考えた「避難カルテ」を作成している。このカルテの効果は絶大で、これを通して住民1人1人が「ここに行けば助かる」という明確なイメージをもつことができる。また町役場は、これに基づいて町全体の避難計画のシミュレーションを綿密に行うことができる。

取り組み3の背景: 避難カルテの作成は、2013年1月31日の「第2次黒潮町南海地震・津波防災計画の基本的な考え方」の公表を受けて始められた。この「基本的考え方」では、防災の基本目標が以前の「避難放棄者ゼロ」から「犠牲者ゼロ」へと引き上げられた。

犠牲者「ゼロ」を目指すには、文字通り「全て」の住民が必ず逃げられるという確信を持つことが必要だ。しかしそれは相当に高いハードルだった。このハードルを越えるために、「職員地域担当制」を活用して、地区の担当職員が全ての住民とワークショップで直接細やかな相談をしながら1人1人のカルテを作成した。

黒潮町の取り組みを支えるもの

以上のような取り組みの全てを支える背景として、次の3つを挙げることができる。

全体的背景1: 中央防災会議による南海地震の被害予想発表の後、町長から黒潮町役場の全職員に向けて、「どうしても無いとあきらめるような発言は、その一切を禁止する」とし、「困難な道のりにはなる

が、職員一同の奮起を要請する」で締めくくられる訓示文が読み上げられた。その結果、あきらめムードが広がりつつあった町役場で、防災に向けた士気が一気に高まった。

町長もまた、他のすべての町民と同様に、中央防災会議の発表を知った途端に絶望的な心持ちとなっていた。しかし町長は「リーダーたる自分がここであきらめれば、町そのものが文字通り津波で消滅する」と考えて、「1人の人間も絶対殺さないための防災体制を作り上げる」という決意を固め、「訓示文」をしたためたのであった。

全体的背景2: 南海地震の被害予想発表の直後に黒潮町では、まず確固たる「防災思想」を打ち立てることが目指された。そして役場から「第1次黒潮町の南海地震に対する基本的な考え方」が発表され、これが町としての防災思想の基本原則となった。この思想の根本に据えられたのは、「避難放棄者を出さない」という目標である。

ただし、思想や目標を示すだけで、住民からあきらめの気持ちが払拭されるわけではない。住民の気持ちを前向きにするには、目に見える形の取り組みを素早く打ち出すことが大事であるため、町役場は「避難道の整備」など具体性のある事業にすぐに取りかかることにした。

全体的背景3: いつ起きるか分からない地震に備えるには、取り組みを長く継続することこそが大事である。しかし防災というのは過酷な取り組みだ。常に被害をイメージするような、辛い精神作業は続かないものであり、「新しい避難道にちょっと登ってみようかな」ぐらいの感覚でなければならない。

黒潮町では、「南海地震と向き合うのではなく、付き合う」という感覚が大事であるとされており、こうした「ゆるやかな防災」という形で、各種取り組みが町全体にじつくりと浸透しつつある。

参考文献

- 1) 秋吉貴雄, 伊藤修一郎, 北山俊哉: 公共政策学の基礎, 有斐閣ブックス, 有斐閣, 2010.
- 2) 菅野雄介: 八ツ場ダムとは, 2014/11/27 アクセス, <http://www.asahi.com/topics/八ツ場ダム.php>.
- 3) 藤井聡: 社会的ジレンマのための処方箋・都市・交通・環境問題のための心理学, ナカニシヤ出版, 2003.
- 4) 土木学会誌編集委員会(編): 合意形成総論賛成・各論反対のジレンマ, 社団法人土木学会, 2004年.
- 5) 田中皓介, 神田佑亮, 藤井聡: 公共政策に関する大手新聞社報道についての時系列分析, 土木学会論文集 D3 (土木計画学), Vol.69, No.5.
- 6) 羽鳥剛史, 藤井聡, 水野絵夢: 政府の公共事業を巡る賛否世論の政治心理学的分析, 交通工学, Vol.44, No.5, pp.55-65, 2009.
- 7) Green, M. C., Brock, T. C.: The role of transportation in the persuasiveness of public narratives, Journal of Personality and Social Psychology, 79 (5), pp.701-721, Nov 2000.
- 8) Thorndyke, P. W.: Cognitive structures in comprehension and memory of narrative discourse, Cognitive Psychology, Volume 9 Issue 1, pp.77-110, 1977.
- 9) 斎藤清二(編): ナラティブとケア第1号特集: ナ

- ラティブ・ベイスト・メディスンの展開, 遠見書房, 2010.
- 10) 浅野智彦: 自己への物語論的接近—家族療法から社会学へ, 勁草書房, 2001.
 - 11) 森美保子, 福島脩美: 心理臨床におけるナラティブと自己に関する研究の動向, 目白大学心理学研究, 第 3 号, pp.147-167, 2007.
 - 12) Denning, S.: Effective storytelling: strategic business narrative techniques, *Strategy and Leadership*, vol.34 no.1, pp.42-48, 2006.
 - 13) 藤井聡, 意思決定における物語の役割, 行動計量学会第 39 回大会抄録集, 2011.
 - 14) 藤井聡: 景観改善の「物語」とその「伝染」について, 都市計画, 57 (6), pp. 21-24, 2008.
 - 15) 夏山英樹, 藤井聡: 東日本大震災における「くしの歯作戦」についての物語描写研究, 土木計画学研究・講演集, CD-ROM, 45, 2012.
 - 16) 川端祐一郎, 浅井健司, 宮川愛由, 藤井聡: ナラティブ型コミュニケーションが公共政策をめぐる政治心理に与える影響の研究, 土木計画学研究・講演集, Vpl.49, 2014.
 - 17) Bruner, J.: *Actual Minds, Possible Worlds*, Boston: Harvard University Press, 1986. (ブルーナー, J. (田中 一彦訳): 可能世界の心理, みすず書房, 1998.)
 - 18) アリストテレス, ホラーティウス, (松本仁助, 岡道男 訳): 詩学 詩論, 岩波書店, 1997.
 - 19) Joseph Campbell, 平田武靖・浅輪幸夫(監): 千の顔をもつ英雄, 人文書院, 1984.
 - 20) Labov, W. and Waletzky, J.: Narrative analysis: oral versions of personal experience, *Journal of Narrative & Life History*, Vol 7(1-4), pp.3-38, 1997(original: 1968).
 - 21) 箱田裕司, 都築誉史, 川畑秀明, 萩原滋: 認知心理学, 有斐閣, 2010.
 - 22) Zwaan, R. A., & Radvansky, G. A.: Situation models in language comprehension and memory., *Psychological Bulletin*, 123, 162-185, 1998.
 - 23) León, J. A., & Peñalba, G. E.: Understanding causality and temporal sequences in scientific discourse. In J. Otero, J. A. León, & A. C. Graesser (Eds.), *The psychology of scientific text comprehension.*, Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates., Pp.155-178, 2002.
 - 24) 井関龍太, 川崎恵里子: 物語文と説明文の状況モデルはどのように異なるか: 5 つの状況的次元に基づく比較教育心理学研究教育心理学研究 54(4), 464-475, 2006-12-30 日本教育心理学会.
 - 25) Zwaan, R. A., Magliano, J. P., and Graesser, A. C.: Dimensions of situation model construction in narrative comprehension, *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, 21 (2), pp.386-397, 1995.
 - 26) Zwaan, R.A., & Brown, C.M. The influence of language proficiency and comprehension skill on situation-model construction, *Discourse Processes*, 289-327, 1996.
 - 27) 佐藤翔紀, 神田佑亮, 藤井聡: 高知県黒潮町におけるレジリエンス確保のための防災行政についての物語描写研究, 2014.
 - 28) 文部科学省: 高等学校学習指導要領解説 国語編, 2010.

(? 受付)

AN EXPERIMENTAL STUDY ON NARRATIVE-ORIENTEDNESS AFFECTS "NARRATIVEFORM" OF COMMUNICATION ABOUT PUBLIC POLICIES

Yuki TAKAHASHI, Yuichiro KAWABATA, Ayu MIYAKAWA, Satoshi FUJII